

アルネ・ネスのディープ・エコロジー再考 — 存在論からケア倫理の方へ —

開 龍 美

I はじめに

現在のところ、環境運動・環境思想の基軸が、「持続可能性 (sustainability)」の概念にあることは周知のとおりである。「持続可能な開発」のスローガンから始まり、「持続可能な社会」「持続可能な農業」、さらには「サステナブルコーヒー」といった具合である。しかし環境思想史において持続可能性の概念自体は、すでにアメリカ合衆国森林局初代長官G・ピンショア (Gifford Pinchot, 1865-1946) の功利主義的森林管理における「賢明な利用 (wise use)」の思想の前提となっていたことから考えるならば、人間のための自然保護を主張する当時の「環境保全 (conservation)」思想へと遡るものである。この環境保全のやり方を退け台頭したのが「環境主義 (Environmentalism)」¹⁾ と自然のために自然を守る「環境保存 (preservation)」思想であることから見れば、現在の「持続可能性」の指針は、人間と自然との関係性を踏まえていると言いながらも、揺り戻しという時代の動きを感じざるを得ない。

この揺り戻しを象徴しているのは、2004年にBreakthrough Instituteの環境活動家ノルトハウスとシェレンベルガーが報告書「環境主義の死—ポスト環境時代における地球温暖化政策 (The Death of Environmentalism: Global Warming Politics in a Post-Environmental World)」(2004)²⁾ を公表し、さらに同じ立場にある研究者・活動家集団が「エコモダニスト宣言 (An Ecomodernist Manifesto)」³⁾ を発表し、環境主義に退場を求めたことである。両者が拠って立つエコモダニズム (ecomodernism) 思想は、人類が高度化・巨大化した産業経済活動により地球環境に大きな変動をもたらす「人新世 (Anthropocene)」⁴⁾ という新たな「人間の時

1) 1960年代以降の環境運動の高まりとともに形成された環境主義は、運動であり、思想の総体であるが、確定できるひとつの思想がドクマとしてあって、その原理原則に基づいて運動が一枚岩のごとく展開されているものではない。むしろボトムアップによって作り上げられたものである。地理学用語から環境思想へ導入されるに及び、広義には価値観や意思決定において環境を重視する立場を指すが、狭義には、人間中心主義を脱却して、自然・生命の内在的価値と保存の観点から意思決定を行う立場を指す。本論文で用いる環境主義は狭義のものである。cf. R.E. ダンラップ・A.G. マーティグ (満田久義監訳) 『現代アメリカの環境主義—1970年から1990年の環境運動—』 ミネルヴァ書房, 1993年。

2) cf. Ted Nordhaus & Michael Shellenberger, *The Death of Environmentalism: Global Warming Politics in a Post-Environmental World*, Breakthrough Institute HP: https://www.thebreakthrough.org/images/Death_of_Environmentalism.pdf (2017/09/12アクセス). Ted Nordhaus & Michael Shellenberger, *Breakthrough: From the of Environmentalism to the Politics of Possibility*, Boston/ New York: Houghton Mifflin Co., 2007.

3) cf. An ECOMODERNIST MANIFESTO, <http://www.ecomodernism.org/> (2017/09/14アクセス)

4) 「人新世 (Anthropocene)」をめぐり地質学者や環境学者の間で議論がある。いずれにせよ、2000年以降、環境科学全般、環境思想の書物で、この言葉をタイトルしている文献・研究が増えてきている。

代)に入ったことを念頭に置き、この局面の徴表である地球温暖化問題に適切な対処ができる新たな環境思想・運動が今求められていると訴える。その点からすると、「人間社会は、生態学的な崩壊を避けるため、自然と調和しなければならない」という理念を掲げる環境主義は運動としては、自然の内在的価値を重視し人間の活動・干渉を否定し排除しようとするだけで、実効性ある環境政策の実現に繋がらなかったと糾弾する。また思想としても環境主義は、人間中心主義から非人間中心主義・自然中心主義への転換を訴えた結果、一方では近代市民社会が築き上げてきた個人の人権と自由を蔑ろにし、他方では人間により順化される以前の原生自然(wilderness)、文明化される以前の野生(wildness)を徒に理想化し聖別した結果、弊害を招いていると見ている。環境主義に対してエコモダニズムは、「自然により多くの場所を確保するために、人類の環境に対する影響を縮減する」つまり自然に対する人類の依存度をテクノロジーによって極力減らすことを人類の目標としている。「エコモダニスト宣言」を多少なりと読み進めてたところで見えて来るのは、エコモダニズムは、環境主義がその形成期において、その都度批判の対象としてきた技術中心主義(technocentrism)、人間中心主義(anthropocentrism)、環境保全論(conservation)を色濃く反映していることである。この意味で、エコ「モダニズム」といういささか懐古的な名称が今流布していることに、環境思想・運動の大きな揺り戻しを指摘できるだろう。そこで、環境主義に対するこうした反動とともに、環境主義の外部から、あるいは内部で批判的検討が重ねられている現況を見据え、その批判と再検討から新たな可能性を見いだすことを研究の基本線に定めることとし、本論考では、環境主義のなかでもラディカルな思想・運動としてその主流を占めているディープ・エコロジー(deep ecology)について、これまでの環境倫理学での議論を一步踏み出たところでの、環境主義としての新たな展開の可能性を探る。

ディープ・エコロジー思想については多様な系譜を辿ることができるが、ここではアルネ・ネス(Arne Naess, 1912-2009)の哲学(エコソフィT)を基礎とするディープ・エコロジー思想を主題とする。まず、その特徴を列記するならば、①哲学としての深い問いかけ、②文明批判・文化研究、③自己変革の3点になる。第1に、ディープ・エコロジーは、環境科学のアプローチを踏まえながら、環境問題を人間と自然の関わり方、人間としての生き方への問いにまで遡及する。ゆえにディープ・エコロジーは、先入観となっている自然観(=自然を人間から切断し対象化し、その手段的価値を専ら重視する見方)と人間観・自己理解(=人間を自然を支配・制御する存在者とする見方)という根本的前提に至るまで問い直すことを課題としている。最初は単純で明白に見える問題・情況に深く入り込み、そのルーツを掘り起こし、問題の構造と関係を露呈させるという意味で、ディープ・エコロジーは哲学なのである。第2に、ディープ・エコロジーは文明批判として近代社会の諸原理・イデオロギーを検証する。とりわけ地球環境問題を招来した西洋近代が人類の歴史において果たした役割を注視し、西洋近代思想の特徴である人間中心主義・個人主義・合理主義・二元論などを俎上に乗せる。またその一方で、自然と調和的に存続してきた共同体、特に先住民族の共同体において歴史的に育まれてきた多様な環境文化から学ぶ。第3に、ディープ・エコロジーは、生命と自然の内在的価値を尊重し、人間が自らを自然に開放し、人間としての生き方の質の回復を図る人間学的課題を担っている。ネスの場合は、ディープ・エコロジー思想・運動を支える全体論的存在論(=エコソフィT)の観点から、すべての存在者との関係をとらえ直す仕方での自己実現(Self-realization)を通じて、人間としての成熟と全体性の回復を図る。こうして人間にとって、さらに生きとし生けるものたちにとっての健やかさと豊かさとは何かを問い、物質的な生活水準(standard of living)の高さにこだわるのではなく、人間としての生き方の質(quality of life)

に準拠することの意義を説く。そして「この地球上の環境と生き物たちの多様性と豊かさに喜びを感じ取れる成熟した存在者」となることに人間の定義と進化の課題（＝人間の進化課題的定義）を見る。

環境主義の生成とほぼ軌を一にして形を整えてきた環境倫理学は、倫理の適用範囲を人間社会から動物世界、自然世界へと拡張する際に、人権を超えて動物や自然の権利を基礎づける価値を、人間を超えて動物・自然のなかに見いだそうとする環境価値論をもって議論を積み重ね、学問領域としての存在意義を確保してきた。そのような環境主義、環境倫理学の大勢と異にするのがディープ・エコロジーの方向性であった。上記で示したように、ディープ・エコロジーは全体論的世界観を提唱するだけでなく、そのような世界での他のいのち、自然との関わり方を人間の生き方の質への問いに捉え直し、閉塞した自己を生きとし生けるものたちや自然に対して打ち開くという仕方での自己実現の課題を人間学として示している点において出色である。この人間学としての特徴が、ディープ・エコロジーは人間の内面の変革ばかりに集中していて、逆に社会・政治・経済の課題には無頓着であるとの誤った批判を呼んだことも否めないにせよ、環境問題に対する対策をめぐり合意形成を図るツールとして使えるか否かという点だけで、環境倫理学・環境思想の水準・妥当性を推し量ろうとする昨今の傾向にあっては、貴重な位置を占めるものである。そして環境とその問題に直面したところで問われる私たちの振るまい方、生き方を問いただし、おのずからの所作として窮境にある生物や自然を気遣い、行動を起こせるとすれば、それは義務感や法律により強制された行動よりは、人間の生き方としてよりふさわしく、美しいものであるとネスは語る。ネスの説くディープ・エコロジーとその前提となる哲学にあっては、自己と世界に対する見方を転換させる経験があって、それに応じて、おのずと倫理に適った行為が生まれる潜在力が人間には備わっていると。言い換えるならば、倫理からすべてが出発するのではなく、まずは存在論へと問いを遡及させ、存在論から倫理へと立ち返ることが重要なのである。この方向性は環境主義・環境倫理学のほかの思想・理論にはない特徴であって、これが義務論倫理学でもなく、功利主義倫理学でもないところから環境倫理を展開する可能性を示唆しているのである⁵⁾。そして存在論から倫理学へ立ち返ったところで具体的に見えてくるものはケア倫理である。ケア倫理と言えば、メイヤロフの『ケアの本質』⁶⁾から始まり、医療倫理・看護倫理・生命倫理の分野で近年活発な議論が行われているところである。環境思想の分野ではエコフェミニズムの論者が積極的に議論を行っている。しかしエコフェミニズムによるケア論は、人間から動物へと拡大されつつあるが、未だ動物を超えた自然にはその射程が届いていないというのが現状である⁷⁾。

エコフェミニズムは、ディープ・エコロジーと同じくラディカル環境主義あるいはラディカル・エコロジーなどに分類されるもので、「男が文化であれば、女は自然である」という伝統的な定式に代わるものを見つけようとしたフェミニズムが、家父長制に代表される伝統的なパラダイムの転換を求め、自然対人間という二元論を再検討するところから育ってきたものである。こうしてエコフェミニズムは、ディープ・エコロジーと共通点をもちながらも、男性中心

5) ディープ・エコロジーの人間学的課題を精神性・霊性 (spirituality) の問題へと深化させたところで展開されているのがスピリチュアル・エコロジー (spiritual ecology) である。代表的な論者としてはジョアンナ・メイシーがあげられる。ジョアンナ・メイシー『世界は恋人世界は私』を参照。また仏教学者の竹村牧男は、ディープ・エコロジーを仏教の観点から評価し積極的に発言している。

6) Milton Mayeroff, *On Caring*, Harper Perennial, 1971.

7) その代表的論文集が以下のものである。Josephine Donovan & Carol J. Adams (eds.), *The Feminist Care Tradition in Animal Ethics: A Reader*, New York: Columbia University Press, 2007.

主義とその根底にある二元論を批判する観点から、ディープ・エコロジーに対しても批判を向ける。大まかに言えば、ディープ・エコロジーは、人間中心主義批判に際して、人間 (man) というジェンダー中立的なものの考察に留まり、ジェンダー分析が不徹底であるがゆえに、それが逆にジェンダーバイアスとなっている。こうした欠点から、自然の支配・搾取と女性の抑圧・支配が同根の問題であることに気づかないままである。パターンリズムがすべてのものに通底するヒエラルキーを象徴しており、西洋近代の二元論もそれに由来する。その点からすると近代の主客二元論による自然観と人間観を克服せんとするディープ・エコロジーの企図は挫折していると言わざるを得ない、ということである。しかしエコフェミニズムの論者からの批判には、反論すべきもの、誤解を解くべきものもあるが、他方ではディープ・エコロジーの論者によっては看過しがちな論点も含まれている。それゆえエコフェミニズムからの批判を受け止めつつ、ディープ・エコロジー思想の検証を行うことで、新たな可能性が開けてくることが期待される。そして、ディープ・エコロジー思想を最初から担ってきたアルネ・ネスが2009年1月に死去し、またディープ・エコロジー思想をアルネ・ネスとともに支えてきたジョージ・セッションズ (1938-2016) も2016年2月に亡くなった今、1つの区切りとしてディープ・エコロジー思想を総括すべき時ではないかと筆者は感じているところである。

本研究では、以上の問題意識を踏まえ、ディープ・エコロジーの論点・意図を、①ネスの論文 (1973年) にある「関係的・全体的場」「原則的生態圏平等主義」、②「ディープ・エコロジー運動の8綱領」、③ネスのディープ・エコロジー思想の前提エコソフィアの「自己実現論」の3つのフェーズに従い明らかにする。その間に、エコフェミニズムからの提言と批判を吟味しながら、最後に、環境主義における議論の行き詰まりを打開する新たな可能性として、ネスのエコソフィアにおける「自ずから／自ら (spontaneous) の経験」「美しき行為」の概念を取り上げ、ケア倫理への展開の可能性を探る。

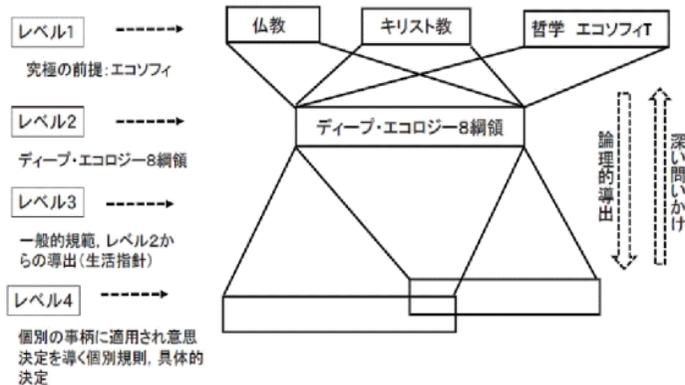
2. 1973年論文の要点：「関係的・全体的場」「原則的生態圏平等主義」

ディープ・エコロジーに対する批判には、ディープ・エコロジー思想・運動に関わる4つのレベルの区別を見逃しているものが多々含まれている。このような誤りは、ディープ・エコロジストであると自任する活動家・著述家にあっても同様である。ディープ・エコロジーの機関誌とも言える学術誌 *the Trumpton: Journal of Ecosophy* (※trumpton: コナキハクチョウ) の編集者を務めるアラン・ドレグソン (Alan Dregson) は、長年の編集・査読の経験を振り返り、その主な原因が「エプロン・ダイアグラム」の4層構造の看過、またそれに起因するディープ・エコロジー運動綱領 (the platform principles of deep ecology movement) とエコソフィア (ecosophies) の混同にあると指摘している⁸⁾。ネスに従えば、ディープ・エコロジー思想は4層構造をなしており、その各々のレベルは相互に密接な関係をもち、全体としてエプロン・ダイアグラム (※エプロン型の図) で示すことができる⁹⁾。エプロン・ダイアグラムで

8) cf. Allan Rike Dregson, "Editorial: Terminology of the Deep Ecology Movement," in *Trumpton* vol.13 (3), 1996, pp. 1-5.

9) cf. Arne Naess, "The Apron Diagram," in Harold Glasser & Arne Dregson (eds.), *Deep Ecology of Wisdom, The Selected Works of Arne Naess vol. X*, Netherland: Springer, 2005, pp. 75-81. 以下 *The Selected Works of Arne Naess* はSWと略記。

エプロン・ダイアグラム



は、上のレベルが前提となり、論理的な関係によって下のレベルにつながる。レベル1は究極の前提 (ultimate premises) であり、多様な宗教や哲学に根ざすものである。ディープ・エコロジーはその多様性を活性化に生かす。そして、レベル2の「ディープ・エコロジー8綱領 (platform principles of movements)」は、ディープ・エコロジーを運動として社会に活かしていくうえで、出自・背景を異にする多様な人たちが連帯できる最大公約数としての原則をまとめたものである。次に、レベル3は、8綱領から導出される一般的規範、生活指針・態度などが該当する。最後に、レベル4は、個々の問題について意思決定を下すための個別の判断規則や具体的決定に関わる場所である。私たちは日々の問題に対する自分の選択・決定に対して多少なりと自覚的になることで、自分の生活・人生全般に妥当する指針や姿勢に気づくことができる。そして、その指針や姿勢の根拠を深く問いかけてゆくなかで、自分の価値観・人間観・自然観とそれらを支える究極の前提に突き当たるのである。以上のような動きがレベル4からレベル1へと遡及する「深い問いかけ」である。以下の論考では、このエプロン・ダイアグラムを念頭に置き、ディープ・エコロジーという名称を初めて導入したネスの論文「浅いエコロジーと深く遠大なエコロジー－要旨－」から始め、レベル2に相当する「ディープ・エコロジー運動8綱領」、そして最後に、レベル1に相当する、ネスのディープ・エコロジー思想の究極の前提「エコソフィT」の要点を順次を考察し、基本概念の配置を確認する。

1972年9月開催の「第3回世界未来研究会議 (The Third World Future Research Conference)」(ブカレスト)でアルネ・ネスは講演「浅いエコロジーと深く遠大なエコロジー運動 The Shallow and the Deep, Long-Range Ecology Movement」を行い、初めてディープ・エコロジーという用語を提案し、その翌年に発行された同名の論文「浅いエコロジーと深く遠大なエコロジー－要旨－」(The Shallow and the Deep, Long-Range Ecology Movement: a Summary, *Inquiry* 誌第16号 (1973), 以下「1973年論文」と略記)で世界に広く認知されるようになった¹⁰⁾。この論文はディープ・エコロジー思想のマニフェストと評され、様々なバック

10) cf. Arne Naess, "The shallow and the deep, long-range ecology movements: a summary," in Harold Glasser & Alan Dregson (eds.) *Deep Ecology of Wisdom, SW, vol. X*, Nethreland: Springer, 2005, pp. 7-12. ネスの生涯や思想形成については、インタビューからなる David Rothenberg, *Is It Painful to Think? Conversations with Arne Naess*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1993が様々なエピソードを紹介しており、彼の思想の幅を伺い知る上でも参考になる。

グラウンドをもつ環境活動家たちが、ディープ・エコロジーのサポーターとして結束してゆく際の典拠となったものであり、またネスのディープ・エコロジー思想の前提エコソフィアの内実を予示している点でも重要である。この論文の冒頭で、シャロー・エコロジー運動が、先進諸国の人々の健康と豊かさを確保しようと、汚染と資源枯渇への対策に集中するのに対して、ディープ・エコロジーは、多様性、複雑性、自律、脱中央集権、共生、平等主義、無階級の7原則により深く関わる運動であると峻別しているけれども、筆者の見るところ、ディープ・エコロジーの特徴を際立て、かつディープ・エコロジー全般からネスのエコソフィアに至る過程に関わる解釈・理解において最重要なのは、「関係的・全体的場」および「原則的生命圏平等主義」の原則である。これら2つの概念は密接に絡む一対のものとして捉えるべきところを、切り離して別個に解釈したり、後者だけに着目したり、あるいは両概念の存在論的意味を見落とすことから、多くの誤解が生まれている。

1973年論文で、まず「関係的・全体的場」については、次のように記されている。

ディープ・エコロジー運動:

1. 「人間が容器としての環境に入っている」イメージを退け、「関係的・全体的場 (the relational, total-field)」のイメージを支持する。生物とは、生命圏すなわち内在的諸関係からなる場における接合点 (knots) である。AとB両者の内在的関係とは、関係がAとBの定義・基本的な成り立ちに帰属していて、この関係がなければAとBもともに以前とは同じものではなくなるということである。コミュニケーションの表面的あるいは導入的なレベルで話をする場合を除き、全体的場のモデルは「人間が容器としての環境に入っている」という見方だけでなく、「周囲環境にぎっしりと物が詰まってる」という見方もなくしてしまう。

ネスは、環境を容器とみなし、そのなかに人間が収まっているという原子論的世界観・二元論を退け、世界は全体として関係の網の目、ネットワークから成り立っているというイメージ、つまり関係論的全体論的世界観への転換を語る。生物は個々ばらばらに存在しているのではなく、相互関係的で一つの全体場に編み込まれた接合点・結び目として現出している。その際、生物が「生命圏の内在的諸関係からなる網ないし場における接合点」(knots in the biospherical net or field of intrinsic relations) であることについて、見落としてならないのは「内在的諸関係からなる」という点である。内在的関係について、上記引用文では「AとB両者の内在的関係とは、関係がAとBの定義・基本的な成り立ちに帰属していて、この関係がなければAとBもともに以前とは同じものではなくなるということである」となっている。言い換えるならば、自己の本質、成り立ち、アイデンティティのなかにすでに他者との関わり、関係性が入り込んでいるということであって、他者なくして自己なしということである¹¹⁾。このことは、ネスのエコソフィアの自己実現論を担う「エコロジカルな自己 (ecological self)」の概念につながるものであることを看過してはならない。まず、①自己は諸関係の総体として生成しており、また他方では、②接合点としてあるという仕方で、自己の二面性が語られている。生物個体は網の目の接合点としてあると言われた場合に、まず第一印象としては、網が一次的な存在であって、接合点である生物個体はそれに比べるならば、存在性では無いに等しい「点」に過ぎないと受け取られてしまう。しかし、接合点・結び目の含意を再検討してみるな

11) この点については、八木誠一の「フロント構造」の思想が示唆に富む。八木誠一『ほんとうの生き方を求めて』[講談社現代新書] 講談社、1985年。

らば、結び目は結び目として諸関係を集約して担うものであり、そこに偶然性に晒されながらも諸関係を自らに結び集約し担うことによる「個性」さらには「主体性」を見出すことは難しくはない。この箇所での「生物個体」を「自己」概念で置き換え、後で述べるエコソフィアの自己実現論への脈略を念頭に置くならば、次のように読み替えることができるだろう。様々な関わり合いの結び目としてある自己は、様々な関わりを自らに自覚的に捉え直す、結び直すという主体性・自由を有していると同時に、身体をもっている以上は、物理的にはさまざまな生成消滅・生老病死に晒されており、また無意識のうちに歴史的に先行する様々な因子によって予め規定され制約されているという意味で、本質的に偶然性・受動性を帯びている。ここにおいて初めてエコロジカルな自己は、関係性の総体として現出しつつも、諸関係を担う主体的・個人的なものとして成立する。つまりここには、個（部分）か全体かという二者択一の解釈は当てはまらない¹²⁾。

次に「生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism)」(これはネスの意図に従うと「生態圏平等主義 (ecospherical egalitarianism)」に修正される¹³⁾) については、以下のように述べられている。

ディープ・エコロジー運動:

2. ディープ・エコロジー運動は、原則としての生命圏平等主義 (biospherical egalitarianism) を承認する。「原則として」というフレーズが追加されるのは、いかなる現実的な実践にも、なんらかの殺生・搾取・抑圧が必ずともなうからである。エコロジーのフィールドワーカーは、様々な様式と形態の生命に対する深く根差した敬意、さらに畏敬すら身につけている。彼は、内面から理解に達する。それは、他者が同胞に対し、また限られた範囲の生物種のためにとっておかれた理解である。エコロジーのフィールドワーカーにとって、生き開花する平等な権利は、直観的に明らかな価値公理である。これを人間に限定するのは、人間そのものの生き方の質に悪い影響を及ぼす人間中心主義である。この生き方の質は、私たちが他の生物種との親密な協力関係から深い喜びと満足を受け取るか否かに、部分的には左右される。私たちが依存していることを無視し、主人と奴隷の役割関係を打ち立てようとする試みは、人間自身の自己疎外を招くだけであった。

ネスは関係主義 (relationalism)、全体論 (holism) としての「関係的・全体的場」の概念をもって、「人間を自然からは分かちがたいものとして位置づける新しい存在論」¹⁴⁾ を提示した。1973年論文では、この存在論の説明の直後に「生命圏平等主義」の概念の説明が続く。しかし、ディープ・エコロジーの特徴として最初に掲げた「関係的・全体的場」と次の「生命圏平等主義」の項目との間には、いささか断絶が感じられる。前者では、網から成る世界の結び目が「生物」である、とだけ言及されていたものが、後者では、人はそのような生命に対して「深く根ざした敬意」を抱き、「生き開花する平等な権利 (the equal right to live and

12) ディープ・エコロジーの活動家たちはがディープ・エコロジーは自然中心主義であると主張し、批判者は自然偏愛だと言って批判する。また、ディープ・エコロジー活動家は、反人間中心主義を主張し、批判者は反ヒューマニズムだと言って批判する。しかし両者はともに同じ誤りを犯している。

13) ネスは生命を最広義に解釈し、海・川・風景・生態系などすべて含める。ゆえに生物圏よりも生態圏が言葉として相応しいと述べている。cf. Arne Naess, *Ecology, Community and Lifestyle: Outline of an Ecosophy*, 1989, p. 29; アルネ・ネス (齊藤直輔・開龍美訳) 『ディープ・エコロジーとは何か』1997年、51頁。

14) Arne Naess, 1989, p. 2; アルネ・ネス, 1997年, 2頁。

blossom)」を直観する、というようにおもむろにクローズアップされる。ネスの意図にできる限り沿う仕方では「関係的・全体場」から「生命圏平等主義」をつなげて解釈するならば、次のようになるだろう。すべてのものが他のすべてにつながり、それぞれが他者との総体的関係を集約し現出しており、それぞれが生あるものとして自らの生を全うしようとしていることを理解すると同時に、果てしなく伸び広がっているつながりの世界を生きている自分とすべての他者が等しく「生き開花する平等な権利」を有していることを直観し自ずと敬意を抱くところに価値公理としての「生命圏平等主義」がある、と解釈できるだろう。しかし、ここで「生態圏 (ecosphere)」と言わず「生命圏 (biosphere)」とし、さらに(後に明らかに示されるネスの哲学エコソフィTの概念である)「自己実現とその内在的価値」言わず「生命への敬意」「生き開花する権利」としたところに、人間を軽視するカルト的な生命礼賛という誤解と批判を呼び込む可能性があったのではないか。この点について、ネスの著作の英訳者であるローゼンバーグは、これがある種のファシズム思想のルーツにある生命崇拜へと傾斜する危険性があるので、ネス自身も「生命」を規範とすることを肯定していなかった語っている。さらには自己実現の概念に比べ、生命の概念は個々人の意思決定と行動の指針とするにはあまりにも漠然として一般的すぎるからである¹⁵⁾。後の節で説明することとするが、本来は「関係的・全体的場」の世界観から、自己実現論につなげ、「生命圏平等主義」の行動指針を語ることで議論が首尾一貫し、両概念の不可欠な関係が明らかとなったはずである。

以上の経緯から、「生命形態すべてが等しい生きる権利をもっているとしたならば、私たちは何も食べられず生きていけないことになる。ディープ・エコロジーの主張は非現実的である」と生命圏平等主義に異議を唱えたり、また現実においては私たちが生きていくうえで他の生物の命をもらわなくてはならないことから、生命圏平等主義はあくまで原則 (in principle) である、とネスが付言していることに対して、「ディープ・エコロジーの主張は論理的に破綻している」という批判もでてくる¹⁶⁾。確かに、ネス自身「生命圏平等主義」という用語はおおげさで誤解を招くと考えていた。ネスの真意に沿うよう解釈するならば、「すべての生命形態がもつ生き栄える権利」という意味での「生命圏平等主義」は、すべての生命形態に対する平等な振る舞いについての実践的規範 (a practical norm) ではなく、殺生を制限する指針 (a guideline)、より一般的には他者の自己実現の妨害を制限する指針を提案しているのと受け取るのがよい。その意味で、ネスは、「これは〈全体を捉える見方 (a total view)〉のわずかな断片にすぎない」(※全体を捉える見方=エコソフィ) と述べている¹⁷⁾。

生命圏中心主義の意図は、ある生物形態(たとえば、人間)が他の生命形態よりも大きな内在的価値をもっているという“線引き”の立場を退け、すべての生命形態の生きる権利は「同じ一つのもの (one and the same)」である主張することにある。しかし、よくある誤りであるが、生命圏平等主義がそれ自体で成り立つ絶対的な倫理的行動規範であると解釈するならば、増えすぎたシカの食害による森林破壊の問題に対しては、シカの内在的価値と森林の内在的価値との狭間で身動きできなくなってしまう。そこで、「生きとし生けるものすべてには内在的価値(生きる権利)がある」と述べる生命圏平等主義から具体的状況へ至るための規則をネス

15) cf. Arne Naess, 1989, p. 8; アルネ・ネス, 1997年, 13頁。

16) 国内で比較的早い時期にディープ・エコロジーを取り上げ、原則的生命圏平等主義をディープ・エコロジーのジレンマと評したものとしては以下を参照。森岡正博「ディープ・エコロジーの環境哲学—その意義と限界」、伊東俊太郎(編)『講座 文明と環境14・環境倫理と環境教育』朝倉書店, 1996年, 45-69頁。

17) cf. Arne Naess, 1989, p. 167, 174; アルネ・ネス, 1997年, 266f, 277頁。

はあげる。それが、「生存への関わり (vitalness) と身近さ (nearness) の規則」である¹⁸⁾。生命の統一に対する直観では、生存の権利は、種を問わずすべての個体には同じ一つのものである。それを前提にして、私たちは、①生存への関わりが大きい利害を小さいものに比べ優先する。そして②より身近なものをより遠いものよりも優先する。人間を特別視する倫理や、下等動物の生存権を保証しない動物解放論における「線引き」は、結局のところ。相手に対して「私の方が価値があるから、私はおまえを殺すことができる」と言うことに他ならない。それは、生命圏平等主義、生態圏中心主義という言葉が意味する生命の統一に対する直観に反しているのである。その観点からすると、むしろ「すまないけれど、飢えた子のために私はお前を殺すしかないのだよ」と無念の思い吐露するほうがその直観に反していない、とネスは語る。これら規則で用いられた用語は、もちろん、曖昧で多義的であるが、たとえそうであれ、その規則は規範の間での避けがたい葛藤において私たちに、生命の内在的価値に対する直観にできるかぎり即した行動指針を与えてくれる。これに対しては、それは結局相手（即ち食用となる動物）を殺すことになるという点では、人間中心主義と何ら変わらないという反論があるであろう。ディープ・エコロジーが価値の優劣をめぐる線引きをせず、みな同じ価値があると宣言している分、いっそう偽善的であるという主張があるかもしれない。しかし、価値の優劣で線引きをすることで動物の殺生について倫理的基準をクリアしたとみなし、それ以上何も心を感じない者よりも、生きてあるものに共感を抱き、その内在的価値を確信しつつも、自分が生きるためにそのいのちを奪わざるをえない「個体としての私のいのち」の現実と葛藤と罪意識を引き受ける者の方が、人間の生き方の質としては高いのではないか。そのようなところからしか、生きとし生けるものと自分との間柄の倫理への道は開かれない。これが原則的生命圏平等主義が意味するところである。

3. ディープ・エコロジー運動8綱領の要点：自然の内在的価値とその直観

環境主義の隆盛に伴い、倫理学が環境とその問題に対応し、人間と動植物・自然との倫理的関わりを再考するところから、環境倫理学が生まれた。自然は人間によって支配・制御されるべきもので、人類の生存を支える資源としてのみ価値があるという人間中心主義に抗して、環境主義が打ち出したのは、自然は人間の利用の有無とは無関係に、それ自体の価値があるという内在的価値論 (intrinsic value theory) であった。環境倫理学は、内在的価値と手段的価値の区分に従い、人間以外にも内在的価値を有するものたちがいるとの認識に基づき、直接的義務の対象を動物・自然へと拡げてきたのである。確かに、内在的価値をめぐる議論は、環境倫理学・環境哲学の推進力になったが、近年の環境プラグマティズムの台頭に示されているように、やがては議論を隘路に追い込む躓きの石ともなった。とは言いながらも、ディープ・エコロジーを始め環境思想が多様な展開を見せた1970年代から90年代にかけては、それらの理論に通底するのは、動植物や自然の内在的価値をめぐる議論・論証であった。ゆえに多様な環境運動や環境思想を非人間中心主義としての環境主義のもとに束ねるためには、内在的価値の概念を生かす必要があった。ディープ・エコロジー運動8綱領の構成を理解するうえでは、このような経緯を理解しておくべきであろう。以下にあげるディープ・エコロジー8綱領の最初の

18) cf. Arna Naess, "Identification as a Source of Deep Ecological Attitudes," in Michael Tobias (ed.), *Deep Ecology*. California: Avant Books, 1988, p. 266f.

バージョンは、アルネ・ネスとジョージ・セッションズが1984年に作成したものである¹⁹⁾。先に述べたように、この綱領はディープ・エコロジー運動の特徴を際立て、かつ多様な思想と価値観をもったエコロジストたちが、ディープ・エコロジーのヴィジョンを共有し連帯できることを第一目的としている。したがって、これがディープ・エコロジーの「定義」「根本原理」であると受け取るべきはない、とネスは釘を刺している²⁰⁾。にもかかわらずディープ・エコロジーの活動家たちのがかなりが、これをディープ・エコロジー思想の本質と受け止めたと思われる。以下にその8項目を列記する。

- (1) 地球上の人間そして他の生命形態の繁栄は、それ自体としての価値 (value in themselves = 内在的価値intrinsic value, 本質的価値inherent value) をもっている。人間以外の生命形態の価値は、人間の狭い目的のためにこれらがもっている有用性とは無関係である。
- (2) 生命形態の豊かさとは多様性は、それら自身において価値があり、地球上の人間と他の生命の繁栄に寄与する。
- (3) 人間には自らの生存に関わる必要 (vital needs) を満たす場合を除き、この豊かさとは多様性を削減する権利はない。
- (4) 人間以外の世界に対する人間の現在の干渉は度を越しており、その状況は急速に悪化している。
- (5) 人間の生活・文化の繁栄は、人口がかなりの減少しても成り立ちうる。他の生物の繁栄のためには、そのような人口の削減が必要である
- (6) 生活状況の意味ある改善には、諸々の政策の変革が必要である。これらは、経済・技術・イデオロギーの基本構造に影響を及ぼす。
- (7) イデオロギーの変革とは主に、高い生活水準への執着ではなく、むしろ (内在的価値を有する状況に根づいた) 生き方の質を理解する変革である。
- (8) 以上の諸点に賛同する人は、必要とされる変革を実行する企てに、直接的ないし間接的に参加する義務がある。

これまでのディープ・エコロジー批判、論争を振り返ると、綱領第5項目にある人口削減の記述からディープ・エコロジーはエコファシズムを孕む危険思想であると判断する者が、多数を占めている。このような解釈を許すことになった原因は、ネスが、ディープ・エコロジー運動8綱領は、サポーターを結束させるための最大公約数の指針に他ならないという位置付けをして、1973年論文の存在論的世界観・自然観をこの8綱領に盛り込まなかったことにあると筆者は考えている。これにより、人間中心主義を招く「人間対自然」の二元論の克服を標榜する環境主義の意図が忘れられ、その結果、ディープ・エコロジー運動・哲学の支持者も批判者も、人間か自然かの二元論の存在者的 (※ontisch: ハイデガーの言葉に倣い「存在論的ontologisch」の対立概念) なレベルの議論に終始してしまった。田村正勝も『見える自然と見えない自然』において、こうした批判に晒される根本的な理由は、ディープ・エコロジーが、

19) cf. Arne Naess & George Sessions, "Platform Principles of the Deep Ecology Movement," in Allan Dregson & Yuichi Inoue (eds.) *The Deep Ecology Movement: An Introductory Anthology*, Berkeley: North Atlantic Books, 1995, pp. 49-53.

20) cf. Arne Naess, "The Deep Ecology 'Eight Points' Revisited," in *Deep Ecology of Wisdom, SW vol. X*, 2005, p. 58.

「存在的自然観」と「存在論的自然観」を明確に分けたうえで、後者の立場にあることを意識し、その意義を主張することをしていないためであると指摘する²¹⁾。

確かにディープ・エコロジーには多様なルーツがあり、それらを結束させる意図が8綱領にあるにしても、要目に二元論克服の世界観をあげず、生命・自然の豊かさと多様性の内在的価値を上位に掲げることに留まるのであれば、ディープ・エコロジーには、他の環境主義思想に比較し際立つ特徴はないことになる。むしろ、ディープ・エコロジーが深い問いかけをする哲学であるから、やはり自然観・世界観・人間観へと掘り下げ共通認識を綱領に盛り込むべきであった。ネス自身は、「『ディープ・エコロジー8綱領』再考 (The Deep Ecology 'Eight Points' Revisited)」(1995)において、フリチョフ・カプラ (Fritjof Capra) から、「すべてのものが結びつき一つにまとまっている (All things hang together)」という世界観を綱領に盛り込むべきではないか、とのコメントをもらったことに触れ、第2項目の修正案として「根本的な相互依存、豊かさ、多様性は、地球上に生きる人間と人間以外のものたちの繁栄に貢献する」を例示している。ネスは確かにそのメリットを認めながらも、このように形而上学的なレベルでの自然観・世界観を運動綱領に持ち込むことを良しとしなかった。それは、一般のディープ・エコロジー活動家たちが、存在論的自然観を十分に理解しなかった場合、往々にして自然神秘主義へと傾斜する危険性があると懸念したからであろう。1973年論文においてネスが生命概念を規範とすることに躊躇したのと同じ理由で²²⁾。

「ディープ・エコロジー運動8綱領」の第1項目で、人間や人間以外の生命形態が生き栄えることの内在的価値、さらに第2項目で、生命の豊かさと多様性の内在的価値に関する記述が続く。1973年論文と8綱領を対照すると、1973年論文での生態圏全域に及ぶ存在の内在的価値の承認を前提に、8綱領を定式化している。そのことに関連してネスは「私としては、すべての生命がそれ自身の内在的価値を有しているという認識は直観に由来すると考えている」と述べる²³⁾。価値の直観については既に1973年論文において、生命圏 (より適切には生態圏) に属するものすべてが有する「生き開花する平等な権利は、直観的に明らかな価値公理である」と明言されている。そこで、すべての存在者の内在的価値の直観の如何を深く問うならば、ディープ・エコロジーのエプロン・ダイアグラムによる第2レベルの「ディープ・エコロジー運動8綱領」から、自ずと第1レベルの「究極的前提 (エコソフィ)」に遡ることとなる。ネスは、スピノザ哲学のコナトゥス (conatus) 概念を援用し、最も広い意味で生きとし生けるものたちはすべて自らの可能性を尽くそうと自己実現・自己展開の過程を辿っており、そのような存在者の在り方に内在的価値があるとして、これを第1規範とする。

ネスは、価値は直観において示されるものであるとする価値の直観主義 (intuitionism) に加えて、自己実現を目指す存在者の内在的価値が、認識主観に依存せず、それ自体としてあると言う意味で、価値客観主義 (value objectivism) の立場をとる²⁴⁾。ただし厳密には、客観的

21) cf. 田村正勝『見える自然と見えない自然』行人社、2001年、29頁以下。

22) cf. Arne Naess, "The Deep Ecology 'Eight Points' Revisited," in *Deep Ecology of Wisdom, SW vol.X*, 2005, p. 59. ちなみにカプラは、アーネスト・カレンバックとの共著『ディープ・エコロジー考』(佼成出版社、1995年)において、ディープ・エコロジー運動8綱領に似た「エコロジーの八法則」を提案し、その第1法則として「生態系の中構成員は関係のネットワークによって結ばれ、そこにおけるすべての生命プロセスは互いに依存し合っている」をあげて、相互依存を強調する。

23) Arne Naess, *Life's Philosophy: Reason & Feeling in a Deeper World*, Athens & London: The University of Georgia Press, 2002, p.109.

24) cf. Arne Naess, 1988, p. 266f.

価値の認識についてネスは「おのずからの価値の経験 (spontaneous value experience)」という言葉当てている。内在的価値とは何かという問いに対しては、「これはそれ自身のために保存されべきである (This should be preserved for its own sake)」という日常的な表現にすでに示されており、具体的内容の世界の直接的経験であるかぎり、価値認識や価値の所在をめぐる批判的考察 (価値主観主義や価値ニヒリズムなど) に対して、直接的経験の優位は揺らがないとしている。そして、おのずからからの価値の経験、言い換えるならば、「おのずから私たちが感じるもの」こそ、私たちが環境・自然のためにみずから一歩踏み出す意思決定においては、私たちが義務感以上に動機づける。そしてネスは、「私たちが他者の内在的価値を生き生きと経験することを可能にするものは何か。要するに、私たちが多様な生命形態と生態圏全体について真剣にその価値を認識できるようにするものは何か」と問いかけたうえで、その答えは「おのずからの一体化 (spontaneous identification)」にあるとする²⁵⁾。つまり、ネスは内在的価値の哲学的議論に立ち入り、そこからディープ・エコロジーの核心を語るのではなく、むしろ内在的価値論への深入りを避け、内在的価値の直観が否定しがたく迫ってくる「他者とおのずからの一体化の経験」に議論を転じるのである。確かに、自然のなかに内在的価値を探し求める環境価値論に拘泥するならば、ディープ・エコロジーの本質として他の環境主義・ラディカル環境主義から際立つものはほとんどなくなるであろう。ディープ・エコロジーの一体化と自己実現の概念をトランスパーソナル心理学の観点に取り込み、トランスパーソナル・エコロジー (transpersonal ecology) を提唱しているワーウィック・フォックス (Warwick Fox) は、この点について、環境哲学にとってスピノザの思想が重要であると論ずるある哲学者に対するネスのコメントとして、環境主義の形而上学の追求していった、それが内在的価値に基づく道徳的説教に終わるとすれば無意味であると論じていることを引用し²⁶⁾、そのことを踏まえ、ネス自身が内在的価値という用語を使う場合には、専門の形而上学者たちが編み出した専門用語としてではなく、一般の多くの人たちにアピールする日常語として用いていることを証言している²⁷⁾。しかしいずれにせよディープ・エコロジー運動8綱領で、生命形態とその豊かさ・多様性の内在的価値が冒頭に掲げられ、一般のディープ・エコロジー活動家たちが、これがディープ・エコロジー運動・思想の核心であるというように、様々なところでアピールすることで、多くの誤解と混乱を招いたと言わざるを得ない。

25) cf. Arne Naess, "Intrinsic Value: Will the Defenders of Nature Please Rise," in Peter Reed & David Rothenberg, *Wisdom in the Open Air*, Minnesota: the University of Minnesota Press, 1993, p. 71.

26) cf. Arne Naess, "Environmental Ethics and Spinoza's Ethics," in Nina Witoszek & Andrew Brennan (eds.), *Philosophical Dialogues: Arne Naess and the Progress of Ecophilosophy*, Loham/New York: Rowman & Littlefield Publishers, 1999, p. 92. 以下その該当箇所「環境主義の形而上学に関するロイドの思想の中心にあるのは、人間のために動物を搾取することや、もっと一般的には、人間以外の領域を目的自体・価値自体として扱わないことが道徳的に悪であるという見方である。……しかしスピノザの哲学は、道徳の哲学ではなく、寛容・忍耐・愛の哲学ではなかったか。環境主義の十分な形而上学を見いだそうとすると、私たちは道徳的な説教の方に転じなければならないのだろうか」。

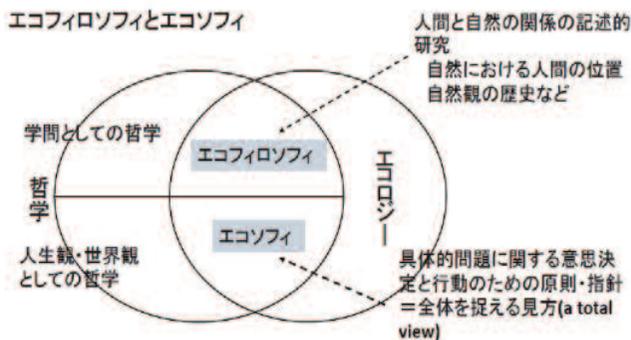
27) cf. Warwick Fox, "On the Interpretation of Naess's Central Term 'Self-Realization,'" *The Trumper* 7:2 Spring, 1990, p. 99.

4. エコソフィTの要点：一体化と自己実現・成熟

(4.1) エコソフィTの要石としての自己実現論

ディープ・エコロジーのエブロン・ダイアグラムにあるレベル1「究極の前提」には、仏教やキリスト教などの宗教、そして哲学、エコソフィ（ecosophies）が例示されている。哲学における「学問としての哲学」と「人生観・世界観としての哲学」に分類に従い、ネスはエコロジーと哲学がクロスオーバーする領域で共通の諸問題について研究を行う分野をエコフィロソフィ（ecophilosophy）と呼び、他方、各人が個別の具体的な問題に関わり、意思決定を下す際に導きとなる前提・世界観をエコソフィ（ecosophy）と命名した。エコソフィはエコロジーの語源にもなっているギリシア語 oikos（=家/家に居住するものおよびその日常生活）と哲学（philosophia=知恵の愛求）の語源になっている sophia との合成語である。つまり、エコソフィは「地球に住み暮らすことの知恵」を意味する。ソクラテスに例証されているように、sophia には実践の意味が込められている。すべての知恵ある洞察は行動に活かされるべきであるし、また行動を通して実現されなければならない。これにならうならば、私たちは自らが置かれている実際の状況に対処するため、それぞれに自分のエコソフィをもつ必要がある。ネスはディープ・エコロジーを通して、現代の地球環境問題という文脈のなかで、知恵の愛求としての哲学の本来の在り方をエコソフィという形で復活させようとしている。

各自のエコソフィが、ディープ・エコロジー運動8綱領を受け入れる際の哲学的な根拠を与えてくれるわけであるが、登山家でもあったネスは、自分が所有する山小屋の名前（Tvergastein）にちなみ、自分のエコソフィをエコソフィTと呼んだ²⁸⁾。本論文第2節で1973年論文の「関係的・全体論的場」と「生命圏（生態圏）平等主義」の概念から考察を始め、第3節の「ディープ・エコロジー運動8綱領」へと辿り、本節で最上位のエコソフィTにまで辿り着いたが、エブロン・ダイアグラムの示すとおり、4つのレベルをゆるぎない構築物にする最後の“要石”が自己実現論である。つまりは、ネスのエコソフィTとその究極規範「自己実現（Self-realization）！」から、ディープ・エコロジーの全体像が見えてくることとなる。ネスの意図としては、この概念は心理学的にはなく、存在論的概念として理解されるべきもので



28) エコソフィはエコロジーから大きな刺激と啓発を受けているにせよ、生態学をそのまま至上原理としているわけではない。むしろそのような姿勢は生態学至上主義 (ecologism) と呼ぶ警戒すべきものである。生態学は確かに非常に豊かなものを含んでいるけれども、これを普遍的学と受け取り、生態学の諸概念・諸理論を過度に一般化するとともに生態学至上主義が生まれる。その点から、ネスはエコソフィにはあくまで全体的見方 (a total view) としての哲学が必要であると訴える。

ある。いのちあるものたちすべてについて共通する特徴とせば、自己保存の基本的欲求であるが、ネスはこれをより能動的に「自己実現」という概念に読み替える。生きとし生けるものたちは、みな生命として自らの可能性を実現しようとしている。自己実現の概念の要点を論文「自己実現－世界内存在へのエコロジカルなアプローチ (Self Realization: An Ecological Approach to Being in the World)」(1988) に即してまとめると以下のようになる。① 私たちは自分自身を過小評価している。そして自己 (self) と自我 (ego) を混同しがちである。② 人間の本性は、十分に (全面的に) 成熟すると、自分自身をすべての生きとし生けるものと「一体化」せずにはいられない。③ 伝統的に、自己の成熟は、3段階を経て展開すると考えられてきた。すなわち、自我が社会的自己へ、さらにそれが形而上学的自己へと成長する。しかしこの考え方では、自然が大幅に除外されている。身近な環境や家、そして人間以外の生きているものたちとの一体化が大幅に無視されている。そこでネスは「エコロジカルな自己 (ecological self)」の概念を提起する。私たちは、その発生以来ずっと自然のなかで、自然の一部として、自然のために存在してきた。私たちの自己は人間関係・社会関係を越えて、生きとし生けるものとの共同体における関係から成り立っている。エコロジカルな自己とは関係性において成り立つ。自己が他者に関係づけられてあるとは、言い換えれば、自己が何ものかに方向付けられており、その方へと向かうことそのもの――それは一体化と自己実現の動向に他ならない――が自己の自己性の成立に不可欠なものであることを述べている。④ 生きるこの意味と喜びは、各々の存在者が自己実現する程度に応じて深まるものである。自己実現の程度は自己というものの幅と奥行きともに高まる。⑤ 成熟の高まりとともに、自己は他者と一体化せずにはおれないものであるから、奥行きと広がりを増してゆく。一体化を、「他者のなかに自己を見る」という仕方でもネスは表現している。一体化する相手の自己実現が妨害された場合、私たちの自己実現も妨害されたと感じる。ゆえに、「自己を生きろ、他者も生かせ (Live and let live!）」という原則にしたがい他者の自己実現を助け、この障害を克服してゆくのが真の自己愛でとされる。このように自己が成熟してゆくと、利他主義によって得られる以上のものが得られるはずである。ネスはこれによって利己主義か利他主義かの二者択一の閉塞を打破しようとしている²⁹⁾。しかし"Live and let live!"という表現は「私は私、あなたはあなた (無闇には干渉しません)」という消極的な意味でも用いられるということを踏まえるならば、どのように他者と一体化し他者の自己実現を我が身のこととしようとしても、私自身が生老病死に晒された肉体と常に揺らめく心と精神を有する存在者、つまり偶然性を本質とする脆い存在者であるかぎり、そこには限界がある。その限界が深く刻み混まれた私であるがゆえに、課題としていっそう強く迫ってくるのが生態圏平等主義の指針であり、究極の自己実現の理念である。

(4-2) 自己実現における「個」と「全体」の相互規定

ネスの自己実現論に対する批判では、エコフェミニズムが際立っている³⁰⁾。エコフェミニズ

29) cf. Arne Naess, "Self Realization: An Ecological Approach to Being in the World," in John Seed, et al. *Thinking Like a Mountain*. Philadelphia: New Society Publishers. 1988, p. 19f.

30) cf. Party Hallen, "The Ecofeminism-Deep Ecology Dialogue: A Short Commentary on the Exchange between Karren Warren and Arne Naess," in *Deep Ecology of Wisdom, SW vol. X*, 2005, pp. 274-280. エコフェミニズムの内部には多様な分派があり、論点が多様であることから、上記の論文がディープ・エコロジー批判の整理としては簡便である。

ム内部には分派があり、ディープ・エコロジーについて多様な観点から吟味・批判がなされているが、社会論・政治論に留まらず、哲学の議論に立ち入り全体論や、ネスの一体化と自己実現論を考察しているマーティ・キール (Marti Kheel) の論考「自然の解放」(1985) および「エコフェミニズムとディープ・エコロジー」(1990) をここで取り上げる³¹⁾。

キールは、最初にディープ・エコロジーとエコフェミニズムの共通点を示す。環境倫理学の諸理論の大部分が、内在的価値の所在を動物・自然へと拡張し、権利と義務を合理的に基礎づけることを目的としてきた。それに対して、ディープ・エコロジーとエコフェミニズムはともに、権利・義務概念をとまなう内在的価値論を受け入れない。しかし両者は環境問題の根本原因に関する見方において、袂を分かたず。ディープ・エコロジーは人間中心主義に原因があり、その是正のために生態圏平等主義と自己実現論を提唱する。他方、エコフェミニズムは、真っ先に責任を問われるべきは、家父長制を典型とする男性中心主義であると指摘する。そして両思想の違いを理解する鍵は、それらが前提にしている自己概念の違いにある、とキールは説く。ディープ・エコロジーが人間中心主義や拡大された自己と言うとき、その自己概念は表面的には、男性でも女性でもない中性である。人間中心主義の世界観では、人間を自然界の頂点に据えるが、エコフェミニズムからすれば、この世界観自体が男性特有の見方であって人間一般の見方ではない。そもそも自然を超越することで獲得されるのが男性のアイデンティティなのである。

精神分析の対象関係論をエコフェミニズムの議論に応用したディナースタインの分析を引用し、キールは男性のアイデンティティ確立の過程における女性の否定と対象化について考察する。対象関係理論によると、男子のアイデンティティの確立は、他者 (= 母親・女性的なるもの) の否定と対象化にかかっている。ディナースタインは、この分析を自然に対する男性のあり方に応用する。つまり、男子の自己アイデンティティは、周囲世界との未分化の状態から、周囲世界を対象化し否定したうえで確立されることを考えると、女性的なものを一切否定したところで、女性的でないもの、自然的でないもの上にはじめてに確立される。こうして否定と対立の関係のなかで男性性が確立され社会化されるとすれば、男性的な自己アイデンティティの確立過程は様々な問題を孕む。キールは、男性的自己のアイデンティティ確立が抱える問題を考察するにあたり、対象関係論における男性概念をネスのエコソフィアの自己概念に読み込む。まず、イートンやオルテガの狩猟哲学に着目し、狩猟における動物の殺傷と人間の自己実現における心理の平行関係を批判的に考察する。狩猟はどんな行為よりも奥深く、獲物としての自然との一体化を経験することであり、男を自然に完全に結びつける。そして動物と一体化しようと動物の真似をする狩人の感情は、獲物への執着、深い情熱、エクスタシーと尊敬の念の混ざるアンビバレントなものであると言う。つまり狩人は殺す動物を愛しているのだ。そこでキールは、狩猟における狩人 (男性) の動物に対するアンビバレントな心理を、母親の否定により形成された男性的自己のアイデンティティは、その疎外感ゆえに、母親との未分化な原初的一体性への憧憬が増幅されるというバンビバレントな心理と重ね合わせる。つまり、狩猟

31) cf. Marti Kheel, "The Liberation of Nature: A Circular Affair," in Josephine Donovan & Carol J. Adams (eds.), *The Feminist Care Tradition in Animal Ethics: A Reader*, New York: Columbia University Press, 2007, pp. 39-57. 初出は, *Environmental Ethics*, vol.7, no.2, 1985. Marti Kheel, "Ecofeminism and Deep Ecology: Reflections on Identity and Difference," in Irene Diamond & Gloria Feman Orestein (eds.), *Reweaving the World: The Emergence of Ecofeminism*, San Francisco: Sierra Club Books, 1990, pp. 128-137. マーチ・キール「エコフェミニズムとディープ・エコロジー」I, ダイヤモンド & G.F. オレンスタイン (奥田暁子・近藤和子訳)『世界を織りなす』学藝書林, 1994年, 215-229頁。

のアンビバレントな性格を例証として、一体化の行為において相手と一体化したいという欲望と相手を殺傷したいという欲望とが共存しうることを、つまりエコソフィTにおける一体化と自己実現には、他者を否定しようとする欲動が孕まれていることを主張しているわけである。エコソフィTでは、個としての自己が自己実現の過程で他者を否定し同化吸収してしまったり、自己実現の究極において個が全体に解消されるのではなく、個と全体の相関性を存在論のレベルで論じ、両者は相互に規定しあっているものであることを強調しているにもかかわらず、ネスの全体論と自己実現論では、個の存在が主題化できていない、あるいは脅かされるとキールはもっぱら批判している。

そこで反論として、第1に、自我実現 (ego-realization) と自己実現 (self-realization) の区別に触れなければならない。自我 (ego) とは実体としての主観であり、自律と自立を本質とする。したがって、他者との関係は副次的である。自我は道徳的窮境にあつては、自己利益を考えて利己と利他の狭間で苦しむ。私の自我実現は他者の自我実現を阻むからである。自我実現が自己利益を最優先する場合、やがては他者に対立し差別・排除・暴力を向ける。このような自我実現に伴う困難は「お前か私か! (Either you or I!)」に集約され、倫理は義務と権利の用語で語られることになる。では自己 (self) とは何か。ネスの1973年論文における全体論的・関係論的世界観に照らせば、自己とは相互に関連し全体的場 (total-field) に編み込まれた接合点である。ここにネスのエコソフィTの核心をなす「エコロジカルな自己」の概念が存在論レベルで示されている。この理解から、人間と動植物・自然、人間と地球がお互いに対象として屹立するのではなく、諸々の関わりのなかで連続しているとされ、自分自身を他者とのつながりのなかで自然全体に統合された存在者として捉え直すことが、すべてのものが断片化する現代社会のただ中にある私たちに要請される。ネスはこれを人間の成熟の課題として自己実現の概念と「自己を生きろ、他者も生かせ! (Live and let live!)」の指針に込めたのである。次に第2の反論としては、キールがディープ・エコロジー批判を批判する際に手づるとしているイートン、オルテガの狩猟哲学に指摘できる一体化のアンビバレントな心理とその前提にある自己の位置づけは、エコソフィTの一体化と自己実現の自己概念とはベクトルを異にしていることを指摘しなければならない。いつも既に特定の状況のなかで閉塞している自己の状態 (= 個我) から、自らを他者に向け打ち開く一体化の方向性と、自他未分化な原初の状態へと回帰・退行しようとする自己の方向性とは、真逆である。エコソフィTの自己概念と自己実現論は、自己を成熟へと「前進」させる課題として与えられている。子供が母親と心理的に未分化な原初状態を思慕することは、自己の融解・消滅への「後退」の誘惑であって、決して「自己」の実現ではない。キールがエコソフィTの一体化を子供の母親との原初的な心理的融合状態と同じものであると解釈するのは、エコフェミニズムの論者がほぼ共通して、ディープ・エコロジーの一体化・自己実現論は、相変わらず二元論に囚われ、男性原理で貫かれ、個体が無視されるばかりで、個体 (部分) よりも全体を優先する「誤った全体論」に与しているからである。

では、キールが「自然の解放」で提示している、二元論を解消する"正しい全体論"とはいかなるもので、そこでは個と全体はどのように捉えられているのか。これを明らかにする。

大多数の全体論者が忘れてるのは、全体が個々の存在者、つまり情動・感情・傾向性をもつ存在者から構成されており、これらの存在者が全体の一部分であるということだ。全体の善がいかなるものであるのかを、理性的分析だけを頼りに決めるのは、特定の状況における感情とその表現の現実を無視することになるのでないか。

・・・私が提案している全体論の概念に従うとすれば、自然は相互関係の動的な網の目の一部をなす個体を包含しており、そうした相互関係においては、感情・情動・傾向性（つまりエネルギー）が統合的な役割を果たしている。・・・³²⁾。

上記の引用文からすると、「自然世界は相互関係の動的な網の目の一部をなす個体を包含している」と述べるキールと、世界は全体として関係の網の目、ネットワークから成り立っており、生物は個々ばらばらに存在しているのではなく、相互関係的で一つの全体場に編み込まれた接合点として現出している、と言うネスとでは、世界という大枠においては本質的な違いはないように見受けられる。全体論の適否をめぐるキールが批判的に取り上げている「個と全体の関係」については、1973年論文における「関係的・全体的場」の世界観よりは、エコソフィアの自己実現論の方が的確な議論をしている。つまり、そこでは、自己実現の発端にある「個としての自己（小文字のself）」と、それが他者との一体化を通して究極的に到達する「個を超え個を包摂する全体としての究極の自己（大文字のSelf）」との関係が主題化されているからである。キールの疑義を解消するには、この点を明らかにしなければならない。

ネスは、形而上学的な最大限の自己に対応するものの1つの表現を『バガヴァッド・ギーター (Bhagavadgita)』(6章詩29)におけるアートマン (atman: 自己) に見いだしている³³⁾。ここから自己実現における自己の位置づけ、そして個と全体の関係が解釈できる。「ヨーガに専心し、一切を平等に見る人は、自己（アートマン）を万物に存すると認め、また万物を自己のうちに見る。私を一切のうちに認め、一切を私のうちに見る人にとって私は失われることなく、また私にとって彼は失われることがない」³⁴⁾。ここでは、個と全体の相互規定・相補関係において、個が多様性として、そして全体が多様における一性・統一として経験されている。経験的存在者である私たちは、最小限の自己実現と最大限の自己実現の間のどこかに位置しているが、その都度の段階で、私たちを含め個はなんらかの仕方で全体を表現している。しかし、ここで言う最大限の自己実現（自己実現の究極）は、神秘的融合状態であると考えべきではない。神秘主義の伝統では、個別的自己が多様性を欠く至高の全体に溶け込むことを強調されているからである。エコソフィアでは、最大限の自己実現と最大限の多様性とは緊密な関係にある³⁵⁾。キールが“誤った全体論”と言っているのは、個が全体に溶け込んで消滅する神秘主義な全体論であり、それは全体が個に優先する新たな二元論を持ち込んでいるとして退けられるべきものである。そして自他未分化な原初状態への回帰としての母性との一体化を希求する男性的自己のあり方も、全体への動きのなかで個である自己を忘失することに他ならない。エコソフィアの自己実現論を忠実に辿るならば、キールの批判が妥当しないことが分かる。ネス自身も複数の著作において自己実現における自己の変容について、警戒と危惧を語っている。「ここには辿るには難しい尾根がある。私たちの左側には有機的・神秘的見解の大海が広がり、右側には原子論的個体主義の深淵が横たわっている」³⁶⁾。左側に落ち込むならば、自己はエクスターゼの過程で神秘的全体のうちに消失する。右側に陥るならば、自己は自らに執着するあ

32) Kheel, 2007, p. 44.

33) cf. Arne Naess, "Identification as a Source of Deep Ecological Attitudes," in Michael Tobias (ed.), *Deep Ecology*, California: Avont Books, 1988, p. 260.

34) 上村勝彦訳『バガヴァット・ギーター』岩波書店, 1992年, 66頁。

35) cf. Arne Naess, 1989, pp. 200-204; アルネ・ネス, 1997年, 321-327頁。

36) Arne Naess, 1989, p. 165; アルネ・ネス, 1997年, 262-263頁。

まり個我・孤我（ネスの言葉では自我ego）と化し、自我実現の過程で他者の支配に夢中となり自己を失う。どちらに落ちこんでも自己を失い自己実現は挫折する。自己実現（self-realization）は最大の自己実現（Self-realization）を理念としながらも、あくまで自己を失うことのない「自己」実現でなければならない。以上の言説を言い換えるならば、全体論における個と全体は相互に規定しあうのであるが、個としての自己は実体ではなく、無数の関係性を集約し全体を表現する仕方でも生成しているという意味で、全体から規定されている一方で、身体を有する自己として、今・ここに限定され個体として個性を有しながらも、主体性をもって、自らの本質を形作る関係性を捉え直し、辿り直すことで、自己を打ち開き、自らを広く深く成熟させていくことができる。すなわち全体と個の相互規定のなかで、自己実現を果たす。このことをネスは、あらためて『ディープ・エコロジーとは何か（Ecology, Community, and Lifestyle）』の冒頭で、人間の進化課題的定義としてあげている。つまり、「私たちは生物学的に受け継いだものにより、この緻密な生きた多様性に喜びを感じる。このように喜ぶことができるという能力はさらに成熟しうるものであって、直接的な環境との創造的な関わりを促す」。人間は自己実現を通して、自然の多様で豊かな姿をみずからのこととして喜ぶことができるようになる。究極の自己実現とは、日常世界での生きとし生けるものたちとの誠実な関わりのおける喜びの体験である。これが人間が人間らしく生きることの課題である。

しかし、キールばかりではなく、広くエコフェミニズムの論者たちが言う、全体論の配置にあって、かけがえのない個体をもつ感情・情動の意義はどのように受け止めるべきであろうか。この点については、エコフェミニズムの指摘を踏まえ、ディープ・エコロジーにおける感情の位置づけの問題に進まなくてはならない。そしてここで、ディープ・エコロジーのケア倫理への可能性が見えてくる。

5. 「おのずからの経験」からケア倫理の方へ

キールを始めエコフェミニストたちは、環境倫理学を支配する理性主義を受け入れない。環境倫理学の理論の大多数が、価値のヒエラルキーとそれに基づく普遍的な行為規則（多くの場合は倫理的義務の適用範囲をめぐる線引き規則）を合理的に確定しようとする試みである。そしてその試みの前提には、価値のヒエラルキーと普遍的な行為規則の妥当性を説明できるのは、理性だけであるという確信がある³⁷⁾。このこのような環境倫理学全般における理性とその普遍的原理への志向に対して、エコフェミニズムとディープ・エコロジーは共通してこれを退け、人間の行動における感情・感性の意義を重視する。それはエコロジカルな感性（ecological sensibility）と総称してよいだろう。キールは理性に基づく普遍的規則の限界について、次のよう述べている。

行為の普遍的な合理的規則を定式化しようとするなら、絶えず変化する現実の实在世界の本性を無視することになるし、各々の特定の状況における感情的本能的な、あるいはおのずからの要素（spontaneous component）をなおざりにすることにもなる。なぜならば、最終的には感情は線引きや規則には盛り込みようがないからである。感情は、一挙に空間、時間や

37) cf. Kheel, 2007, p. 45.

38) Kheel, 2007, p. 45.

生物種の壁を乗り越えてしまう。私の印象では、環境倫理学の大多数の著述家たちは、感情の役割を認識できていない³⁸⁾。

環境倫理学では、内在的価値を人間に限定せず、内在的価値に相応しい特質を人間以外のものに探し求め、それに応じて権利を付与するという倫理の拡張を進めてきた。こうして内在的価値の所在を生物個体に限定する個体論倫理や、その所在を個体生物から生物種、生態系へと拡大する全体論倫理を作り上げたが、キール曰く、それらの理論は新たな形式の「個 vs 全体」の二元論を持ち込んだだけであった。そこでネスは、温存されている価値・権利・義務の伝統的概念に基づく倫理学からいったん離れて、「関係的・全体的場」「ゲシュタルト存在論」「自己実現論」において存在論的世界観と人間観を描いて見せたのであった。つまり理性から感情・感性へと重心を移して、そこから倫理学を立ち上げたとしても、それはやはり理性—感性の二元論に留まり、理性から離反したところでの感情・感性の理論は、結果として反理性・不合理に傾くだけである。それゆえ、ネスは理性—感性の二元論から脱出するために、関係論的全体論的世界観へと遡及し、そこで世界と自己の見方（＝世界理解と自己理解）の転回を遂げたところから、改めて新たな世界・自然の経験の仕方と私のあり方を明らかにし、義務・権利の倫理とは異なる倫理への通路を示す。

ネスは『ディープ・エコロジーとは何か』第2章において、森林伐採をめぐる開発論者と環境保護論者との対立について、次のように説明している。

敵対する者の間の違いは、倫理の違いではなく、むしろ存在論の違いである。・・・彼らは、現実の实在を非常に異なったように見て、経験している。双方とも「森」という同じひとつの言葉を使っているが、異なった存在を指している。・・・倫理から存在論へ進み、そして倫理へ戻るのが、環境主義の哲学では大切だと私は考える³⁹⁾。

ネスのエコソフィアにおいて「関係的・全体的場」あるいは「ゲシュタルト的存在論」と呼ばれる関係論的全体論的世界に基づくならば、自然と自己はどのようにあるのか。デカルトに代表される近代哲学の二元論にあっては、自然とは延長実体としての物体であり、客観的記述として与えられるのは第1性質（幾何学的・力学的性質）だけであり、それが自然の真の实在（reality）である。そしてそれ以外の第2性質（色・味・温かさ等）や第3性質（もの悲しさ、力強さ等々）は主観的なものとして排除される。しかしエコソフィアにおいては、現象学的手法に類似して、第2性質・第3性質が真正な存在論的地位をもつ感覚的实在として承認される。ネスは物体に替えて「関係的場（the relational field）」の概念を援用する。関係的場とは、私たち存在者が相互に関係づけられている経験全体を意味する。そして物体と言われるものは、その場の接合点あるいは結び目である。その接合点である存在者は、自らの本質を構成する諸々の関係の変化に応じて、異なった性質を帯びて立ち現れるが、「同じ存在者」である。ここで「同じ存在者」とは同一性を保つ実体という意味ではなく、その存在者を規定する諸関係が同じ概念に収斂しているという意味である。ゆえに諸関係の配置の変容に応じて同じものが、同時に異なったものとして現出しても、それは矛盾ではない。また矛盾するからと言ってそのものの本質ではないと無視されることなく、その当該のもの真正な性質として承認され

39) アルネ・ネス, 1997年, 108-109頁参照。

る。関係場における存在者のこのような現出の仕方を、プロタゴラスが「知覚するすべてのものの元は、物体のなかにある」と主張したことにひっかけて、「プロタゴラス的双方肯定理論 (Protagorean 'Both-and' theory)」とネスは命名している。たとえば、同じ常温の水 (W) でも、一方で食料の冷凍貯蔵室から素手で作業を終えて出てきた人の手 (A) には、温かく感じられるが、他方暖かい部屋でストーブに手をかざしていた人の手 (B) には、冷たく感じられるだろう。同じ水が温かくもあり、冷たくもあるということであるが、水そのものは温かくも冷たくもないということではなく、前者では「WはAに関して温かい」あるいは「関係的なものWAは暖かい性質を示す」という表現となり、後者では「WはBに関して冷たい」あるいは「関係的なものWBは冷たい性質を示す」となる。ゆえに、温かい、冷たいは主観の側にはなく、水はそのような性質をその都度帯びてそのままに立ち現れているのである⁴⁰⁾。この見方により、抽象的構造と化しホワイトヘッドをして「面白くもないもの、音も香りも色もない」と嘆かせた自然は、私たちが感じ入るあるがままの豊かな具体的な世界として甦る。ネスが、人間と自然とを連続的なものとして結び直す存在論と言ったときの真意がここにある。

では、存在論から再出発して、そこから私たちが到達する倫理とはどのようなものか。立ち返った存在論的自然観により、主客二元論というバイアスから逃れたところで、立ち上がる私たちの経験とは、「おのずからの経験 (spontaneous experience)」に集約される。おのずからの経験の概念は、ネスのエコソフィアを理解するうえで重要な概念である。ディーブ・エコロジーの自己実現とは、エゴイズムに突き動かされ他者を飲み込み、その差異性・多様性を消去してゆくプロセスである、とエコフェミニズムは解釈した。しかしその誤解は、自己実現のプロセスである一体化が、カントの先験的主観の能動的自発性によって可能となる主意的意図の経験などではなく、人間の成熟に伴うおのずからの経験であること見落としている。ネスが論文「ディーブ・エコロジーの姿勢の源泉としての一体化」(1984)で述べているように、「一体化とは、おのずからの、非理性的 (non-rational) だが反理性的 (irrational) ではないプロセスである。そのプロセスを通じて、別の存在者の利害に自分自身の利害として応答するのである」⁴¹⁾。では、他者との一体化がおのずからの経験に発するものであれば、その行為はどのようなものなのか。ネスは、これを「美しき行為 (beautiful action)」と呼ぶ。義務論が語るように、利他と利己の狭間で定言命法として迫ってくる義務を果たす行為は、道徳的ではあっても美しくはない。義務論によれば、感覚的欲求に抗して義務を遵守する行為のみが道徳的であるが、自らの傾向性に従った行為が義務に準じた行為とたまたま同じであっても、それは非道徳的ではないにせよ、厳密には道徳的行為とは言えない。しかし美しき行為は、道徳法則に反するものでない限りは非道徳的なものではなく、道徳的であると言うべきであろう。ネスは、美しき行為には義務論的行為のように心に葛藤が伴わず、それゆえ人が環境行動のような特定の行為へと進むのを容易にするだけでなく、習慣となれば義務論的行為より確実であると見る。

他者との一体化の本質として示されたおのずからの経験に発する行為が、美しき行為であるとすれば、この美しき行為は具体的にはどのような形を採るだろうか。筆者は美しき行為はケアに繋がると考えている。ここで改めて思い起こすべきは、ネスのディーブ・エコロジー思想とその前提エコソフィアは、環境哲学であるにせよ、人間学を基本的性格としている点である。つまり、人は自己理解の深まりの過程で他者に開かれ、他者との関わりのなかで成熟し、様々な関係性によって導かれている自己のあり方を自覚するに至る。そのような自己理解の変

40) cf. Arne Naess, 1989, pp. 54-57; アルネ・ネス, 1997年, 89-92頁。

41) cf. Arne Naess, 1984, p. 261.

容と深まりが、ネスのエコソフィアの核心にある。そのことを踏まえるならば、以下に語られるネスの言葉には、美しき行為からケアのおのずからの発露が確かな道筋として見えてくる。

自己が拡がり深められるなら、必要とされるケアは自然に発露し、その結果、自由な自然 (free nature) の保護が私たち自身を守ることと同じように感じられる⁴²⁾。

ケア倫理の古典である『ケアの本質 (On Caring)』(1971)において、著者メイヤロフ (Milton Mayeroff) は、「ケアすること (caring)」と「場所のなかにいる／適所を得る (in place)」という2つの概念が、人間であることについて、実りある考え方を教えてくれる、と述べている⁴³⁾。まず、ケアすることの概念についてである。提示されているケアの基本的パターンによれば、「ケアの相手が成長するのを助けることとしてのケアの中で、私はケアする対象を、自分自身の延長のように身に感じるとあり、エコソフィアにおいて「他者のなかに自己を見る」⁴⁴⁾という仕方での一体化の姿勢と重なるものである。しかし、ケアする際に経験される相手との一体化の経験は、自分も相手もなくなってしまう合一的感情でも寄生的関係でもないし、支配的關係とも誤解されてはならない。相手を私の一部として感じる取る経験には、あくまで相手が本来もっているかけがえのなさのゆえに、私とは独立した存在であると受けとめる経験が伴うものである。そうでなければ、ケアを通して相手に誠実に応えることにならない。この感覚・経験はメイヤロフのケア論に即して言えば、ケアすることにおける「差異のなかの同一性」である。ケアにおける同一性の感覚は差異性の意識を含むものであり、他者と自己との間の差異の意識は、両者の一体感も含んでいる。そこには、私たちを一緒に包んでくれている何ものかに、私たちが参与しているという感覚がある。それゆえに、メイヤロフは「汝である他者をケアし、その成長を助けるなかで、私は自分自身を実現する」「私が自分自身の自己実現のために他者が成長するのを助けようと努めるのではない。他者が成長するのを助けることによって、私は初めて自分自身を実現するのである」⁴⁵⁾と述べて、ネスと同じく自己と他者との本質的關係性について、他者との關係性において初めて自己のアイデンティティが形成されること、私の自己実現が相手の自己実現と本質的に連動している事態を洞察している。

次に、メイヤロフはケア論の第2の要点として、ケアにおける自他の関わりにおいて、初めて「世界において場所のなかにいる／適所を得る (in place)」ことが可能になると言う⁴⁶⁾。このことは、ケアを1対1の關係における生き方の場面から広い文脈に移すことで、ケア概念の含意とともに明らかになる。ケアの実践においては、自分の諸々の活動・営みが「地」となり、ケアが「図」となり際立つことにより、ケアを中心に自分の活動・生活が全体としてのまとまり、配置が定まってくる。そのような働きがケアにあるとメイヤロフが言うとき、ケアという自己を超えて他者に関わる行為が、自己のアイデンティティに本質的なものなり、自分の生活全体の意味の中心を担うという理解を示しているのであろう。ケアがより多くの物事に及

42) Arne Naess, "Self-Realization: An Ecological Approach to Being in the World," SW, Vol. X, p. 527.

43) cf. Milton Mayeroff, 1971, p. 3.

44) Arne Naess, *Ecology, Community and Lifestyle: Outline of An Ecosophy*, Cambridge: Cambridge Uni. Pr., 1989, p. 172; アルネ・ネス, 1997年, 274頁。

45) Mayeroff, 1971, p. 40.

46) Mayeroff, 1971, p. 68.

ぶ包括的なものになれば、それを通して私たちの生活の全体が実りあるものとして秩序づけられてくることになる。こうすることで、自分がこの世界のなかで「自分に相応しい場所にいる／適所を得ている」という場所に拠り所を得て安定した感覚を抱くようになる、とメイヤロフは説明する。メイヤロフの説明は言葉が足りず不十分であるが、筆者の理解するところでは、ディープ・エコロジー、そしてディープ・エコロジーと緊密な関係にあるバイオリジヨナリズムに通底する「場所の感覚 (sense of place)」の思想に触れている。他者を他者として尊重してケアすることは、「自らの可能性を尽くそうとしている」他者の内在的価値を直観し、おのずからの心の動きに応じて、相手の自己実現を自らの自己実現と同じくケアすることである。こうしてケアを通して自己のあり方を捉え直す過程で、他者の自己実現を助けることにより自分の自己実現が助けられていることへの理解から、自己と他者との本質的関係性を辿りなおし、そこにすべてのものをそのつながりのなかで支えている場所のイメージが直観される。それはケアにおける一体化と自己実現を通して現れてくる全体的場所のイメージである。これはネスのエコソフィアが提示する「関係的・全体的場」の世界観である。もっとも、メイヤロフが語っているのは、このようなコスモロジー的な大きな形而上学的世界観と言うよりは、他者に対する自らの気遣い（それは他者との一体化への向かう人間の成熟過程であるが）を身近な人間から動物・植物へ、そして遠い自然へと誠実に深く広げていくことで、自己が他のものたちとのつながりの確信を経てより豊かなものとなり、自己とほかの様々なものたちがともに生活を営むこの場所が自らのアイデンティティと重ねなり合う拠り所となる「場所の感覚」を「場所の中にある／適所を得る」と表現している。メイヤロフのケア倫理にしろ、ネスのディープ・エコロジー、そしてバイオリジヨナリズムにしろ、関係性を通して初めて自己のアイデンティティが与えられることを共通して語っている。

そして最後に、人間以外のものたちを、おのずからの経験に基づきケアすると言った場合、ディープ・エコロジーにおいては具体的にはいかなる行動が想定されるだろうか。ケア倫理を環境倫理へ接続する鍵となるのは、「弱さ」の概念・存在論であると筆者は判断している⁴⁷⁾。「弱さ」の概念については、ここでは主題と紙幅の都合から立ち入らないこととして、一言だけ触れるにとどめる。哲学・倫理学の伝統には、実体として自立かつ自律的な主体を主観として、あるいは人格として設定し、普遍性と必然性を志向する「強さ」の概念・「強者」の思想が浸透している。それに対して、存在者の実体性を否定する関係的・全体論的世界観では、すべての存在者はみな関係性の接合点として現出しており、様々な関係のなかで動揺し、偶然性を本質としている。これを人間学に読み替えるならば、人間は普遍性・必然性を自らの存在に求めようとしても、偶然性に貫かれ生老病死に晒されている弱い存在者である。偶然性に立脚する人間学は弱さ・脆さを見据えた支え合いとケアの倫理を踏まえたものでなければならない。この視点がフェミニズムには鮮明に打ち出されており、ディープ・エコロジーの人間学・存在論が受けとめ、主題化すべき観点であろう。

では、弱く脆い存在者であることを自覚し、またそのような存在者への眼差しから出発する人間のケアはどのような形を採るのだろうか。そのひとつに、「弱きものたちのために証言する」という行動がある。生態圏平等主義、およびエコソフィアの第1規範「自己実現！」が示すところから言えば、私たちは、自己の感覚を拡げ、動物・植物への一体化・ケアを進めていくところで、自然に対するこれまでの誤った関わり方への自己批判とともに、諸々の生き物た

47) cf. ファビエンヌ・ブルジェール (原山哲, 山下りえ子訳) 『ケアの倫理—ネオリベラリズムへの反論』文庫クセジュ, 白水社, 2014, 72頁。

ちが自己実現を生きていることへの敬意を自覚するに至る。そしてそれと同時に私たちは、そのような自然界のあり方を見据えて、おのずからこれをケアするように踏み出して行けるはずである。ディープ・エコロジー運動におけるそのような行動とは、各人に課題として示されたケアの一つとして、弱きものたち、声をあげられないものたちに代わり「証言する／証人となる (bearing witness)」という実践である。この実践は、キリスト教をはじめとする諸宗教の伝統のなかで受け継がれているもので、大雑把に言えば、自分の体験した神の真理を人々の前で語り、自らがその模範となることである。この実践がディープ・エコロジーのサポーターたちのなかで、人間の無知蒙昧と暴力のゆえに絶滅に追い込まれている声なき生き物たちになり代わり、関係者を前にして、あるいは一般の人々の前で、生き物たちの生存の真実を語ることにして捉え直されている。証言するには、当該の生物の身になって感じ、考え、行動できるだけの深い一体化と、その生物たちとともに自己実現の大いなる生命のプロセスを生きているという確信が求められる。このような実践は、ディープ・エコロジーをケア倫理へと接続するための実践例と言えるのではないだろうか。

6. 結語

本研究の目的は、昨今の環境主義批判およびエコフェミニズムとの相違点・共通点を踏まえて、アルネ・ネスのディープ・エコロジー思想を読み直したうえで、ディープ・エコロジーの正当な解釈からケア倫理へと展開できることを検証することにあつた。そして、その目的の背後にある動機は、本論文冒頭でも記したように、ひとつには、ネスの死去に接し、ディープ・エコロジーを学んできた者として一つの総括をしておきたいという気持ちと、もうひとつは、議論の停滞がうんぬんされる環境倫理学の状況に対して、環境倫理学を環境プラグマティズムのように合意形成のツールに縮小してしまうのではなく、医療倫理・生命倫理等で豊かな議論を展開しているケア倫理へと接続できないかという問題意識にあつた。確かに、西平直は編著『ケアと人間』において、ケアをめぐる議論が、「ケアする者－ケアされる者」という1対1モデルにとどまっており、コミュニティ、地域、自然・エコロジー・宗教といった広い文脈にケアを位置づけ、掘り下げる試みが大きく不足していると指摘している⁴⁸⁾。こうした指摘を踏まえるならば、本論文の到達点は、ネスのディープ・エコロジー思想の構造を、1973年論文から始まる重要なテキストに解説・注解を加え、誤解を解くやり方で辿り、存在論的自然観に発する人のおのずからの経験が、美しき行為として、確かにケアへとつながることを示唆したに過ぎない。環境主義の流れにおいて、エコフェミニズムとディープ・エコロジーは、絶対性・普遍性を志向する理性よりは、エコロジカルな感性を重視する点を始め、多々共有点があり、双方の思想が補完し合うことで環境主義の現状を乗り越え、その可能性をさらに追求できるだろう。

(2017年10月18日受理)

48) 西平直 (編著) 『講座ケア(3) ケアと人間－心理・教育・宗教』 ミネルヴァ書房, 2013年, ii 参照。